3. 人間関係科に新しくかかわる教員として

1) 教師と学生のかかわりをめぐって

―心理臨床分野の教員として―

木　村　晴　子（南山短期大学講師）

ひとつの事例　；　子どものころから常に成績が良く，やさしくて礼儀正しい優等生として過してきた少女がいた。ところがそうした半面，少女は周囲に対して比較的さめた目を持っており，中でも教師に対して彼女が向けていた目と批判的な思いには子どもらしからぬ部分が多くあった。授業参観の日になると態度や言葉使いが一変する教師，よく出来る彼女に特別に親切であったり，なにかにつけて構いたがったりする教師，仲間同士でお互いに反目する教師……一般に，小さい子どもは教師というものは偉い人だと思っていることが多い。しかし，少女の目に教師はあまり好ましいものには映らなかった。とりわけ，彼女がどうしても受け入れ難く思われたのは“友達のような先生”であった。――教師の中には生徒たちの間にまるで友達のように親しく肩をたたいて気さくに入り，良い先生として人気のある人がいる。彼女はこうした教師を好まなかった。その態度はひどくわざとらしく思われ，物わかりのよい教師を気どる彼らが生徒指導の担当であったりすることを苦々しく感じていた。教師は教師らしく常に威厳を持ち，生徒に迎合することなく，豊かな知識と余裕をその授業の中で伝える存在であってほしかった。もちろん，彼女が影響を受けた教師もある。そうした教師は親しげな態度で意図的に自分から生徒の中に入ってこようとするのではなく，教師自身が自分の伝えるべきものを確かに持ち，生徒の方がそうした部分に魅力を感じてそれを自らの世界の拡大に生かせることができるものであるとき――少女はその教師を“良い”と感じた。

これはある少女の対教師観のごく一部であり，少女は私自身である。

私が心理臨床の分野を専攻するようになった過程はここでは省略するが多分に偶然の要素が強いものであった。その分野で私は“先生”と呼ばれたが教師としてではなく，まず「治療者」となった。治療の理論にはさまざまなものがあるが，私が最も大切にしたいのは「治療者が治すのではなく，被治療者が自分で治って

いくのだ（ self heeling ）」という考えであり，「被治療者の自己治癒力を信じて待つ」という基本的な姿勢を自分の中に持つことである。そのことによって被治療者の側に，治療者に対する信頼と，無条件で守られているという確信（ basic security）が得られ，自らを癒していくエネルギーが発揮されることになる。その過程を私は１０数年の臨床の実践の中で強く実感してきた。

人間関係科はいろいろな意味において教員と学生の接触が極めて密な所である。教師に対して前述したような気持を持っていた私がこの人間関係科に来ることになったのは決して偶然ではないと感じている。

人間関係科での教育は「教師が学生とともにある教育」であると言ってよい。その学生対教師の間には，私が臨床活動の中で基本的な姿勢として大切にしている側面が大きなウエイトを占めて生かされうると考える。学生にさまざまな体験の場を提供し，そこで彼らが感じ，挑戦し，気づき，成長していくのを見守る者としての教師は，学生の自己成長への衝動を信じ，その芽生えをひたすら待つ者であると言える。 ― それは被治療者の力を信じ，それが発揮されるのを根気よく見守り，待つ心理治療家の姿勢と一致する ― さらに，心理治療関係においては，被治療者の方もまた，治療者に対して絶対的な信頼を持ち，自らが守られているという感じを持つとき，はじめて成長の芽が生まれてくる。こうした治療者－被治療者関係が成立した治療状況の中では治療者が何もしなければしないほど，被治療者の成長は確かなものになるといわれる。専門的なこまかい点の違いはあれ，この治療者－被治療者を教師－学生に置き換えても不都合はないように思う。そして，教育の場においては，対象となる学生がおおむね健康な集団であるため，その成長のエネルギーはさらに大きく，めざましく，かなりの冒険的な試みができるものであることを，私は人間関係科での４年間に体験してきた。

教育を考えるとき，私には次の２つの側面がイメージされる。

１つには「教師が持っているものを伝える教育」である。前述したような意味で，教師は深く，個性的な自らの世界を持ち，それを授業の中で熱意を持って伝えるものでありたい。それは時として被教育者側の受身的な姿勢を誘うものとして批判されることにもなる。しかしながら，学ぶ者がそこから自らの内的世界を開拓し，関心や興味の範囲を広げ，自分の中に新しい種をまくための手がかりとして，教師の伝えるものにかかわることの意義は大きい。幼い頃の私が“良い”と感じた教師の一側面がそれであると考える。

いま１つは「教師が学ぶ者とともにある教育」である。すでに述べたように，そこでは教師は学生の成長の力を信じ，学生もまた，教師との信頼関係の中で守られて，さまざまな試みにチャレンジし，自らを広げていく。この関係の成立した中では教師は操作的なことはしないほど良く，言い換ればそれは教師がどれほど学生を信じているのかによって，学生にとっても，教師にとっても，確実な成果がもたらされることになると言えるのである。そこにおいては教師もまた，学生とのかかわりの中から学ぶ者となると言ってよい。　少女時代の私が好きにな

れなかった「友達のような先生」にはこうした姿勢が基本的に感じられなかったように思われる。

すなわち，前者からは「自らの世界を伝える者としての教師」が，後者からは「信じ，待つ者としての教師」がイメージされる。両側面とも，教育の原場にある者として常に持っていたい姿勢であると思っている。

もうひとつの事例　；　人間関係科に来て間もなくの頃，私は自分にとって印象深い1人の学生に出会った。彼女は全体からみると全く目立たず，とりたてて自己主張もしない。ごく地味な学生であった。しかし，授業の中で彼女とかかわっていくうちに，私は彼女の極めてユニークで才能ある部分に注目するようになった。同時に，彼女が昔の私に似た，教師に対する不信感を根強く持っていることも知るようになった。子ども時代になにかひどく傷ついた体験があり，彼女のそれは私よりもさらに根が深く，教師というもの全体に対する嫌悪といってもよいほどのものであった。そのような彼女との接触は，提出されるレポートやノートへのコメントという形での対話や時たまの面接であった。その中で私は彼女の考えや感じ方を，私がどう受けとり，理解したか，彼女に対して私が何を感じているかをそのつど伝え返していった。そうしたかかわりを通して，私は彼女の能力を認め，彼女もまた心を開いていってくれた。彼女に対して治療者の役割をとろうと意図したことはない。しかし，ふりかえってみると，これは臨床家としての私がかかわった1つの治療教育であったと感じている。『私にとって，初めてといっていい，“先生”に会えました……』卒業が近づいた頃，彼女はこのようなメッセージを私にくれた。治療状況の中でのpositive transferenceにはよく出会うが，こうした健康な学生の反応にはそれ相応の確実な成長が感じられ，そのことを通して私は教育者として，心理臨床家としての自分の姿勢を彼女から学びえたと感じた。

昭和56年にこの人間関係科に来てから（正確にはその前年のワークショップ合宿に外来講師として参加してから），私は教育者としての自分を育ててきたと言ってよい。人間関係科に来るまでの私は一途に熱意をもって自分の世界を伝えようとする教師であった。そして同時に，臨床の場においてはひたすらに被治療者を見守り，受け入れつつ待ち，ともにあろうとする治療者であった。そこでは教育者としての私と，治療者としての私との間に少なからぬギャップがあったように思われる。この4年間，学生とともに過し，学びえたものは，そうした問題をかかえた私にとって，1つの成長といえるものであると感じている。

さらに今後の課題として，こうした教育の成果を，学生，教師ともに，いかに確認し自らの可能性をさらに広げるための基礎にしていくのかを考えていきたいと思っている。